

	(特集)	
英	語	の
	語	彙

「英語らしい英語」を使うための 語彙



佐藤誠司

筆者はかつて中学・高校・大学受験予備校の教壇に立っていましたが、当時は自分が教えている英語に対する問題意識をあまり持っていませんでした。しかしその後、自作の英文や試験問題をネイティブスピーカーにチェックしてもらう機会が増えるにつれて、学校英語や受験英語と実際の英語との隔たりを実感し、「英語らしい英語」を指導することの大切さに思い至りました。

■「英語らしくない英語」とは？

最もわかりやすいのは、(一部の) 大学入試問題の英語でしょう。たとえば、筆者の自前の大学入試問題データベースで「関係代名詞の but」を検索すると、最近10年間程度に限っても4件ヒットします。次の整序作文問題はその1つです。

「あなたの決心を称賛しない者は、私たちのなかにはほとんどいない。」

There [your, of, few, but, us, determination, admire, are]. (1999年 T 大学文学部) 念のため何人かのネイティブに完成した英文 (There are few of us but admire your determination.) を見せましたが、これを正しい英語と認めた人はもちろん一人もいませんでした。この種の不自然な英語は、残念ながら今でも大学入試問題の中に時折見られます。

学校英語でも、学習の便宜のために「花に水をやりなさい」を (Water the flowers. でなく) Give water to the flowers. と英訳したり、現在分詞の限定用法を説明する際に a running boy のように示したりするのも、英語圏で実際に使われ

ている英語から見れば問題があります。

あるいは、This is a proverb whose meaning I don't know. のような文はどうでしょうか？ 筆者の経験では、この文に抵抗を感じるネイティブは少なくありません。「物 (proverb) の後ろに whose を置くのは不自然だ」という理由からです。そこで「より自然な文に直してください」と頼むと、たいてい I don't know the meaning of this proverb. という答えが返ってきます。

このように「英語らしい英語」は文法・作文の指導とも深く関連していますが、ここでは「語彙」の面から「より自然な英語」の指導方法を考えてみたいと思います。

■使用頻度に対する意識

より自然な語彙を使えるようになるためには、「使用頻度の高いものを優先的に覚える」という意識が欠かせません。しかし、大学受験対策の単語・熟語集の多くは、この観点を無視しています。たとえば筆者は高校生の頃、ベストセラーだった本で次の2つの「熟語」を暗記しました。

consist of ~ 「～から成る」

consist in ~ 「～にある [存する]」

入試対策という観点からは、この of と in の差が (当時は) 重要だったかもしれません。しかし実際の使用頻度には格段の差があり、consist in は高校生には不要でしょう。あるいは see / do the sights (観光する) の場合も、実際の使用頻度から言えば see だけを覚えておけば十分です。

■インターネット検索の利用

ある語彙や表現が実際にどの程度の頻度で使われているかは、インターネットで検索すれば容易にわかります。試みに Google で see the sights と do the sights を検索すると、それぞれ 1,130,000件と62,400件ヒットしました。約18対1の割合です。

もう一つの例として、till / until を挙げてみます。『ジーニアス和英辞典』には「《米》《英》とも今は一般に until が好まれる」とあります。Google で検索すると、やはり until の方が till の2倍近くヒットします。このようにネット検索は、語彙の使用頻度を知るのに役立ちます。

■教壇での指導例

「英語らしい英語」を生徒に意識させるための語彙や表現の選び方の例を、以下に示します。

- 例1** 一人で喫茶店に入り「コーヒーをください」と注文するとき、一番自然な表現は？
- ① Give me a cup of coffee, please.
 - ② A cup of coffee, please.
 - ③ Coffee, please.

説明 一番自然な言い方は③。①は「コーヒーをたください」というおかしな意味になる。②は、一人で2杯のコーヒーを一度に注文する人はまずいないから、わざわざ「1杯の」と言う必要はない。二人で喫茶店に入って二人ともコーヒーを頼むときは、Two coffees, please. でよい。Two cups of coffee, please. でも間違いではないが、コーヒーはふつうカップで飲むものだから、容器を特定する必要はない。注文するのがワインなら、two glasses / bottles of wine と区別する方がよい場合もある。

- 例2** 「君にこのチケットをプレゼントしよう」の英訳として適切なのは？

- ① I'll present you this ticket.

- ② I'll give you this ticket.

説明 正解は②。present は「贈呈する」という改まった語であり、親しい人に物をあげる場合は give を使う。なるべく基本的な語を使うよう心がけよう。

- 例3** 「私はカラオケで歌を歌うのが大好きです」を英訳すると？

説明 正解例は、I love singing karaoke. 「カラオケを歌う」と言えばよい。「歌う」ものは「歌」に決まっているから、singing songs のように言う必要はない。言わなくてもわかる情報は省いて、シンプルに表現しよう。

大修館書店から12月発売予定の拙著（小池直己氏と共著）『英語ネイティブ度判定テスト』にこうした例を多数収録しているので、参考にしていただけると幸いです。

■教師の意識について

筆者は仕事柄、多くの出版社の編集担当者と接してきました。その場で筆者が「中学・高校生向けの参考書は、もっと現実の英語を反映したものにすべきではないでしょうか？」と質問すると、しばしば次のような答えが返ってきます。

「そうしたい気持ちはあるのですが、たとえば文法参考書の記述の一部をカットしたりすると、学校現場の先生方から『なぜこの項目が入っていないのか』といった苦情が来る場合があるので、大胆な改訂に踏み切れないのです」

その背景としては、大学受験で関係代名詞の but のような英語が今でも出題されていること、あるいは（筆者自身がそうであったように）教師自身の勉強不足という面も否定できません。生徒に「自然な英語」「英語らしい英語」を身につけさせることは英語教師の責任の一つですが、それがどの程度実現できるかは、一人一人の現場教師の意識に左右される面が大きいように思います。

（さとう せいし・侘佐藤教育研究所主宰）